

吉行淳之介・丸谷才一・開高 健＝編集

現代日本のユーモア文学 1

立風書房

内田 百閒

井伏 鱒二

三好 達治

吉行淳之介

岡本 一平

司馬遼太郎

佐々木 邦

田村 隆一

池田満寿夫

田中小実昌



吉行淳之介・丸谷才一・開高 健＝編集

現代日本のユーモア文学 **1**



立風書房

現代日本のユーモア文学
第一集



1980年9月30日 第1刷発行

定価 1,000円

現代日本のユーモア文学 1

編 者 吉行淳之介／丸谷才一／開高健

発行者 下野博

発行所 立風書房

東京都品川区東五反田3-6-18

郵便番号141 振替/東京5-74493

電話/東京(03)447-1191(代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社難波製本

現代日本のユーモア文学 第一集 目次

井伏鱒二

白毛……………6

夜ふけと梅の花……………20

三好達治

ちつぽけな象がやつてきた……………36

酒肆長谷川壁上の戯画に寄す……………39

橋の袂の——……………40

〔駱駝の瘤にまたがつて〕より

吉行淳之介

悩ましき土地……………44

皿の苺……………59

岡本一平

刀をぬいて……………76

司馬遼太郎

喧嘩草雲……………126

佐々木 邦

閣下……………160

小問題大問題……………173

田村隆一

リバーマン帰る……………196

池田満寿夫

ミルク色のオレンジ……………202

田中小実昌

教授と娼婦……………242

内田百閒

特別阿房列車……………268

装幀 山藤章二

井伏鱒二

白毛
夜ふけと梅の花

白毛

私の頭の髪はこのごろ白毛が増え、顛頂部がすこし薄くなつてゐるが、後頭部は毛が濃い上にばかりするほど硬いのである。毛の太さも、後頭部の毛は額上の毛よりも三割がた太いやうである。横^{よこ}鬢^{びん}の毛はその中間の太さである。荻窪八丁通りの太陽堂釣具店主人の鑑定によると、私の白毛はテグス絲の四毛ぐらゐの太さである。しかし太陽堂釣具店主人は、まだ私の白毛を抜いたり手にとつて見たりしたのではない。ちよつと見ただけの、粗笨^{そんざい}な鑑定によるものである。この釣具店の常連の一人である魚キンさんといふ魚屋の主人は、私の白毛を抜きとつて本當のテグスと比較して、白毛の太さを綿密にしらべてくれた。キンさんは蟲眼鏡まで出して來てしらべた。それによると、私の後頭部の白毛はテグス四毛半の太さで、横鬢の白毛は四毛の太さである。額上の白毛は正確に三毛の太さである。これはオールバックに伸ばしてあるために、釣の素人の目には本當の三毛のテグスと見分けがつきかねる。

最近、私は屈託してゐる場合が多いのである。仕事にとりかからなければいけないと思ひながら、それでも机に頬杖をついて所在ないやうな風をしてゐることが多い。そんな場合に、私はよく自分の

額上の毛を抜きとつて、無意識のうちにつなぎ合はせてゐることがある。べつに鏡など見なくても指さきで捜して抜く。しかし黒い髪を抜くことがある。五本抜いて黒いのが四本あることもある。六本抜いて白毛が四本あることもある。二本抜いて二本とも黒いときもある。その比率は不定である。どちらかといへば、その比率に白毛のすくないことを願つてゐるやうだが、白毛を抜かうと思ひながら黒いのが抜けるのを願ふのは妙なものである。

そこで黒いのが抜けたときには、私は廊下に吹きとばし、更に團扇^{うちあし}の風を送つて外に消しとばすのである。白毛が抜けると、それを四本か五本、ライターの下敷きにして、一本づつ太さに順序をつけた上でつなぎ合はす。このつなぎかたは釣絲の結びかたによつてつなぐわけであるが、私は釣絲の結びかたはまだありふれたものしか知らないのである。髪毛やテグスやナイロンのやうな伸縮性があつて表面なめらかなものは、普通の絲の結びかたでは解けやすい。うつかりすると折れたり抜けたりすることがある。一般にテグスなどの結びかたにはいろいろ種類があるに違ひないが、私は先輩の釣師に教はつたありふれた方法でやつてゐる。一番簡單なものは漁師結びである。これは白毛の一端を輪に巻いて、それに他の一本の白毛を通して一重結びにする。そして通した白毛の一端を輪に巻いて、右と同様に一重結びにして、左右を引張れば二つの輪が一點に寄つて固く結ばれる。餘分のところは小鋏で切りする。この結びかたのほかに、二重テグス結びといふ結びかたであることもある。これは別名を人造テグス結びともいひ、用心ぶかい結びかたである。三毛の太さの白毛の場合には、この結びかたは扱ひに骨が折れ、三本も四本もつないでゐる間には嫌氣がさして來ることがある。そのほかに藤結びといつて、ヤマメ釣のとき私の好んでする結びかたを採用することもある。山奥の人達が藤蔓を結ぶときにこの方法でやつてゐる。私がこの方法で自分の白毛をつないでゐる場合には、溪流の釣の場面を心に思ひ描いてゐるときが多いのである。しかし溪流の釣を思ひながら、私はよく不快

な記憶に腹立たしくなつて來ることがある。何ともいへない不快な記憶である。私の心づくしは散々に踏みにじられたといつても云ひすぎではない。それでありながら、誰に訴へても一笑に附されるかもしれない出来事である。

去年の六月下旬か七月上旬であつた。もう間もなく私は東京に轉入する豫定にしてゐたので、隣村の四川しがいといふ谿谷がひの或る祠ほくらを見に行つた。よほど以前、もう三十年も前にその祠の前を通つたとき、その常夜燈に油で黒くよごれた油皿と小さな酒徳利があつた。そのときには何の興味も持たなかつたが、後になつてから時たまその陶器を思ひ出すことがあつた。あれは備前焼かもしれぬと友人に話したこともある。しかし私はそれを見に行かうと思つたことは一度もなかつた。疎開中にもたびたび四川へ釣に出かけたが、その祠に行つてみようと思つたこともない。いよいよ疎開を切りあげることになりまつてから、ふと思ひついて行つて見ることにした。もう二度と四川に行くこともないだらうと思つたからである。

その祠は稻荷様か薬師様を祀まつつたものだらう。杉の森のなかに殆ど朽ちかけた祠が建つてゐて、その横に樅の木と竝んで御影石の常夜燈がある。三十年前に見たときと違つて祠は大變に小さく見え、別の祠ではないだらうかと自分の目を疑ひたいほどであつた。常夜燈には油皿も徳利もなかつた。ただ一枚の眞黒によごれた素焼の皿があるだけで、皿のなかには玉蟲の羽根がこびりついてゐた。しかし不快な事件といふのはこれではない。

その常夜燈を見た歸りに、私は四川の土橋の近くで二人の青年に呼びとめられた。二人とも私の見知らぬ青年であつた。一人は半袖のシャツをきて軍服ズボンの古手をはき、白い登山帽をかぶつてリュクサックを背負つてゐた。他の一人は、水色の垂らしワイシャツをきて白ズボンをはき、やはり白い登山帽をかぶつて魚籃いづと釣竿の袋を持つてゐた。人相は二人とも悪くは見えないが、半袖シャツの

青年の茶色の眼鏡が氣になつた。しかしこの茶色の眼鏡の男は、可なり調子よく私に話しかけた。

「六十町一里には驚きますなあ。一里歩けばよいといふから、汽車を降りて歩いて來たんです。もう、へとへとです。辨當たべようにも、お茶を飲むところもないぢやないですか。このへんに、どこか井戸がありますか。」

一方、垂らしワイシャツの青年は、べつの不平を私に訴へた。

「この川の岸には、どこもかしこも梅の木や柿の木を植ゑてゐるから、竿が振れないですね。さつきから、竿の振れさうなところを搜してゐるんですが、どこまで行つても木がいつぱい生えてゐますからね。釣場がなくて困つてゐるところです。あれは大水のとき、岸を強くするために植ゑたんですね。」

この谷川の兩岸には石崖のはなに、梅の木、柿の木、無花果、枇杷の木など、いろいろ取りまぜて果樹が植ゑてある。しかし護岸の目的で谷川の岸に果樹を植ゑるといふことは、今までに私はきいたことがない。

私はこの谷川の釣には慣れてゐる。土橋の下の淵には、いつも大物がゐることを知つてゐる。魚切りの下の淵で釣るときには、浮木も鉛もつけない細いテグスで、靜かに釣りあげて行く必要があることも知つてゐる。この二箇所は私の取つておきのあなであるが、もう私はこの川に來るあてもなかつたので、よそから來た釣師なら私のあなを教へてやつてもいいやうな氣持に傾いて行つた。彼らもこの谷川へ減多に來ることはないだらう。それで私は、先づ彼らを清水井戸のある場所へ案内して、ついでに私も持參の辨當を彼らといつしよに食べることにした。

清水井戸は崖下の一日ぢゆう陽のささないところにある。茶色の眼鏡の青年はリュクサックから折詰を取り出したが、食事にとりかかる前にジャックナイフで蔽だたみから矢竹を一本きつて來て、二人分の箸をつくつた。そしてリュクサックのなかから、ウイスキーの角瓶と、ニュームのコップを二つ

取出して、垂らしワイシャツの青年と酒もりをはじめた。酒の肴は折詰の押鮎である。私は清水井戸に向つて這腹ひになり、その水面に口をつけて咽喉をうるほした後、竹の皮に包んで來た握りめしを食べた。

その清水井戸のほとりは風が吹きぬけて涼しかった。二人の青年はウイスキーを飲みながら、私が釣場の状況について詳細に話すのをきいてゐた。青年は私にウイスキーを飲まさうとはしなかつたが、そんなことは問題でないほど私は自分のおしやべりに満足を感じてゐた。私はいちいち場所を指差して説明した。――正面に見える大きな梅の木ところに土橋がある。その橋の下手の流れは自分の取つておきのあなである。この流れは、浅つば、かけあがり、深んどの、流れの典型とも云ふべき三態をそなへてゐる。魚はたいてい、かけあがりゐて、浅つばから餌の流れに來るのを待つてゐるが、流れが速いので瀬わきに片寄つてゐる。もし釣りそこねたり足音をたてたりすると、魚は深んどのに逃げてしまふ。だから静かに浅つばから餌を流すべきである。そして當りがなくても絲の伸びきるだけ川しにも流して行き、最後に軽く合はせる氣持で竿をあげる。この場合、たいてい無駄はないと思つてさしつかへない。しかしこの釣場には、川岸の梅の木の枝が低く垂れてゐて、うつかりすると竿さきが梅の枝に觸つたり、釣りあげた魚が道絲で梅の梢に吊されたりするおそれがある。だから竿尻に支點を置く心持で、竿を横にして魚の引く方向と反對に竿を撓たがめて行く必要がある。この場合、魚の引く力を考慮に入れながら、竿さきが梅の枝に觸れないやうに氣をつけるべきである。――私は幾らか得意になつて説明につとめてゐた。そして先月の細濁さいにごりの日には、その釣場で十びき以上も大物を釣りあげたと云つた。

垂らしワイシャツの青年はウイスキーを飲んでも口數をきかなかつたが、もう眞赤な顔になつて酔ひを發してゐるやうであつた。半袖シャツの青年は青い顔をして、私の話すのをきいてゐた。私は彼

らの食事が終わるまで釣場案内のおしやべりをつづけ、食事が終わると現場へ案内した。

私は二人を土橋のたもとまで連れて行つた。二人は仕掛にとりかからうとしたが、大事なテグスを忘れて來たと垂らしワイシャツの青年が云ひだした。

「あのとき、仕掛をいぢつてから、積荷の上に置き忘れて來たんだ。神邊驛かんなで乗換を待つとき、プラットホームに忘れたんだ。乗換を一時間も待たされたからね、こんなことになつたんだよ。」

「俺は知らんよ。俺はブリッヂの降り口で、井原町のトミ子さんと立ち話をしてをつたからな」と半袖シャツの青年は、明らかに氣を悪くして突き放すやうに云つた。「とにかく、俺は知らんよ。いまさらそんなこと云うても、俺は知らんよ。俺は、トミ子さんを君に紹介して、それから、ブリッヂの降り口までトミ子さんを送つて行つて、君のことを彼女に噂してやつてゐたんだ。彼女が君に、興味を持つてをるやうだつたからな。」

「そんなことは、僕は知らないよ。しかし、あの女に、あんまりながく君が話してゐるもんだからね。僕は退屈まぎれに、仕掛をしてゐたんだ。」

「それなら、テグスがなければ釣は來んだらう。」

「道絲だけはある」と垂らしワイシャツの青年は、魚籃のなかをしらべながら云つた。「道絲も噛みつぶしもある。浮木も、餌もある。釣もある。仕掛のすんだ鉤と、テグスの束だけ置き忘れて來たんだ。」

垂らしワイシャツの青年は、ズボンのポケットを改めて捜したが、セロファンの袋に入れた南京豆が出て來ただけであつた。半袖シャツの青年は苦りきつた顔をして、川ばたの平たい石の上に坐りこんでしまつた。そして膝の上に抱きとつたリュクサックに頬杖をついた。彼は對岸の梅の木のでつぺんを睨んだ。何とかしてくれと居直つた恰好に見えた。

「道絲では、テグス代用にならないだらうね。」垂らしワイシャツは案外おどおどして、まだポケットのなかを捜しながら云つた。「僕は、瀬の荒い谷川だからと思つて、道絲の太いのを持つて來たからね。テグス代用には駄目だらうなあ。せつかく君がテグスを買つて來たのに、とんでもないことした。でも、テグスは、後で買つて君に返すよ。」

「なに云ふのだ。後で返すとは、なんのことだ。もう一ぺん云うてみる。」

半袖シャツの青年は、垂らしワイシャツの青年を振りむきながら茶色の眼鏡をはづした。いはゆる氣障な眞似とは、こんな仕種を云ふのだらう。しかし彼は立ちあがらなかつた。第一、その場所は川岸の石崖の上の細道で、なぐりあひなど出來るところではない。足を踏みはずすと川のなかへ落ちる。垂らしワイシャツの赤い顔は青くなつて、この青年はいかにも恭順の意をあらはしたやうに、何も云はないで川の水に目を向けてゐた。

私は何か自分が發言する立場に置かれてゐると思つたが、へたに口をきいてはいけないと警戒した。それで差障りない話題を持ち出す氣で、垂らしワイシャツの青年にこんな話をした。

——私は自分のうちに三毛のテグスと八毛のテグスを合計二十本あまり持つてゐるが、残念ながら諸君に提供するわけには行きかねる。私のうちは山の向側にある。無論、この村にはテグスなど賣る店はない。たいていこの村の子供たちは木綿絲で釣つてゐる。しかし、自分は子供のときから釣絲を吟味するたちで、小學校へあがつたころには白い馬の尻尾をテグスの代りに使つてゐた。それは白い馬を連れてゐる馬子の知らない間に、馬に近づいて盗みとつたのである。その手段は、簡單ではあるが危険である。見つかるゝ馬子に叱りとばされるおそれがある上に、馬に蹴られるといふ大きな危険がともなつてゐる。それで馬子が居酒屋で一ぱい飲んでゐる隙に乘じ、馬の斜め背後に近づいて行つて、砂粒を一つ二つ馬の臀部に投げてみる。馬は蠅か虻がとまつたと思つて尻尾を振つて見せるので、

その瞬間に尻尾のさきを掴み、一本すばやく抜きとるのである。そのとき心得なくてはいけないことは、一度に三本も四本も抜きとらないやうに手加減することで、これは人間の髪の毛を抜く氣持で絶対にその手加減が必要である……。

大體において私はさういふ意味の話をした。垂らしワイシャツの青年は、つまらなさうな顔をしてゐたが、半袖シャツの方は私が話し終ると茶色の眼鏡をかけてかう云つた。

「こいつ、べらべらしやべる男だよ。うるさいやつだ。——おい、をッさん、よくべらべらしやべるな。」

この言葉は、私の厚意あるおしやべりに對して不穩當であると私は思つた。しかし咄嗟に受け答へることが出来なくて、私はまごつきながら登山帽をぬいで額の汗を拭いた。相手の茶色の眼鏡をかけた顔は、憎惡に充ちた表情に變つてゐた。

「おい、をッさん、白い馬の毛の代りに、をッさんの白毛を抜いてくれ。いまさつき、をッさん云つたらう。人間の髪の毛を抜く氣持で、絶対に、さうした手加減をすればよいと云つたらう。」

私は反射的にすばやく登山帽をかぶつた。しかし半袖シャツの青年は立ちあがつて、私が「止せ、あぶない、落ちる」と云ふにもかかはらず、私のからだを抱きすくめた。もがけば川に落ちるおそれがあつたので、相手の腕を振りほどかうと努力をすることも出来なかつた。相手が足を踏みはづしても、ともどもに落ちることになる。

「おい、冗談は止せ。みつともないこと、止せ」と私は相手の反省をうながした。「おい、暴力行為は止してもらひたい。溪流の釣師なら、本當に溪流の釣師のやうな振舞をしる。」

「だから、をッさんの白毛をよこせ。おとなしくよこせ。」

「追剥だね。おい、大きな聲で人を呼ぶぞ。」

相手は手易く私のからだの向きを變へ、後から兩腕で私を固く抱きしめた。しかし大聲で救援を求めることを私は遠慮した。この谷間には私の懇意にしてゐる左膳さんといふ人の家もある。その分家の左膳醫院のお醫者も私はよく知つてゐるし、私のうちのものはこのお醫者に何回となく診察を願つてゐる。左膳さんのうちの白壁の倉が直ぐ向うの山の根の石崖の上に見え、その左手に左膳醫院の離れが見えてゐた。いかにも平和らしい山村風景に見え、そのために自分がますますなさけない者のやうに思はれた。私は大聲で助けを願ひたい半面に、この窮狀を誰も見てくれないやうに心に願つてゐた。いい年をして摺みあひをしたと思はれては心外である。しかし沈黙したままで追剝の自由にされる法もないのである。

「おい、人を呼ぶぞ。」私は低い聲をしぼり出した。「その暴力行爲の形式は、羽がひじめの手といふのだらう。それは惡漢が弱者をいたぶる典型的な暴力形式だ。これ以上の侮辱はないぞ。」

「じたばたするな」と追剝は私を痛くしめつけて、私の目の前に立つてゐた垂らしワイシャツの青年に云つた。「おい、コロちゃん、このをッさんの白毛を抜いてやれ。テグスの四毛ぐらゐの太さだらう。ちやうど都合がよい。こいつ、俺のことを追剝だとぬかしたよ。遠慮なく抜いてやれ。」

垂らしワイシャツのコロちゃんは、はじめから氣乗りのしない顔つきをしてゐたが、

「ほんとに、抜くのかね。」

無精たらしくさう云つて、彼は無造作に私の登山帽を取りのぞくと、片手で私の後頭部を抱き込んだ。そして私の額ぎはの毛を一本抜きとつて、ポケットに入れようとしてから口にくはへた。彼の顔は私のすぐ目の前にあつた。その顔つきが何の感興もなささうに見え、反つて私は憎らしく思つた。彼の顔は酒くさかつた。後から抱きついてゐる追剝も酒くさかつた。彼らの行狀は、しかし酔つぱらひの酔興とはいへないのである。それ以上のいかがはしいものであつた。